筑摩世界文學大系

49

ジェイムズ

斎藤　光
西川正身訳
佐伯彰一

ある婦人の肖像
デイジー・ミラー
ねじの回転

筑摩書房

筑摩世界文學大系 49

昭和四十七年二月十五日　初版第一刷発行
昭和四十八年七月二十五日　初版第二刷発行

ジェイムズ

訳者代表　斎藤　光
発行者　井上達三
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷　三晃印刷　製本　鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20649 (出版社) 4604

目次

ある婦人の肖像　斎藤光訳　5
デイジー・ミラー　西川正身訳　378
ねじの回転　佐伯彰一訳　418
ヘンリー・ジェイムズ　H・シクズス　若林真訳　487
投資としてのエクリチュール あるいは、利息の両義性について
解説　斎藤光　504
年譜　510

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ジェイムズ

ある婦人の肖像

第一章

そのときの事情にもよるが、午後のお茶と呼ばれている儀式に捧げられたひとときほど気持のよいときは、この世にはめったにないものである。お茶を飲もうが飲むまいが――もちろんけっして飲まない人もいるのだが――お茶どきの雰囲気がそれだけで楽しいといった場合があるのだ。今この単純な物語を語り始めるにあたって、私が心に描いているお茶の場合は、長閑なくつろぎに、すばらしい道具立てを提供したのだった。お茶のための用具一式がイギリスの古い田舎屋敷の芝生の上に並べられていた。よく晴れた夏の午後も半ばを過ぎたころで、申し分のないといってよい時刻のことである。午後は大分まわっていたが、しかしまだ十分の時間が残っており、この時刻は午後のうちでも、いちばん美しい得がたいものをもっていた。本当のたそがれどきまでにはまだ何時間もあった。しかしあふれるような夏の日差しは弱まり始めていて、大気はしっとりとなごんでおり、なめらかに密生した芝の上には、影が長く伸びていた。しかしその影はゆっくりと次第に伸びて行った。そしてその場の光景は、これからさきの長閑な気持を現わしていたのだが、この気持こそ、おそらく、こういう時刻のこういう光景が人に与える楽しさのいちばんの源なのである。午後五時から八時までは、場合によっては、ちょっとした永遠の時である。しかし今のような場合には、この時刻は永遠の喜びにほかならないであろう。そこにいた人々は静かにその喜びを楽しんでいた。私が述べたお茶という儀式の正規の信奉者たちは普通女性であると思われているが、この人たちは女性ではなかった。彼らの影が見事な芝の上に落ちていたが、それはまっすぐに伸びていて、角ばっていたのだ。その影は、お茶が置いてある低いテーブルのそばの深い籐椅子に腰かけた老人と、その前を、取りとめもない話をしながら行きつ戻りつ歩いていた二人の若い男たちの影であった。老人は手に紅茶茶碗を持っていた。それはひどく大きな茶碗で、ほかのそろいのものとは違った型をしており、はでな色がついていた。老人は紅茶を細心の注意をこめて飲み終え、長い間その茶碗を顎のあたりに支えながら、顔を家のほうに向けていた。老人といっしょの男たちは、紅茶を飲み終えてしまったのか、あるいは紅茶などどうでもよかったのかもしれないが、相変わらずブラブラ歩きながら、煙草を吸っていた。一人は、ときどき、前を通るとき、老人のほうを多少気づかわしげに見ていた。老人は見られていることに気づかずに、彼の住居のしっとりと赤い正面をじっと眺めていた。芝生の向うに建っている家は、このように眺められるのにふさわしい建物で、私が述べてきたきわめてイギリス風な光景のなかでも、もっともイギリス風な特徴をもっていた。

その家は川を見晴らす低い丘の上に建っていた――川はテムズ川で、ロンドンよりおよそ四十マイルほど川上のところにある。長い破風のついた赤煉瓦の正面の色合いは、時がたち雨風にあたったために、さまざまな色彩の細工がほどこされ、しかもそのためにますます見事に雅趣のあるものとなっていたが、芝生に面したその正面には、ところどころに密生した蔦や、何本もかたまって立っている煙突や、蔦に埋もれるばかりになっている窓などが見られた。この家には名前があり歴史があった。お茶を飲んでいる老人は喜んで家の歴史を話してくれただろう――エドワード六世の御代に建てられ、エリザベス大女王の一夜の宿泊所となった家であり(女王はそのやんごとない玉体を、巨大でいかめしく、そしておそろしく四角ばった寝台に伸ばしたわけだが、その寝台はいまだにこの家の寝室のなかでいちばん名誉あるものとされていた)、クロムウェル時代の戦争ではなはだしく傷われ美観を損じたが、王政復古ののち修理があり、大増築がなされ、最後に、十八世紀に改造されて昔日の面影を失ったあとで、アメリカ

の敏腕な銀行家である彼の手にわたり周到に管理されるようになったのだが、もともと彼がこの家を買ったのは、（ここに述べることもできないほど複雑な事情で）これが大競売に出されたためであった。そして買い求めたときは、家が醜悪で、古く、不便なのを大いに不満としていたが、今では二十年もたってみると、この家の美しさに心から夢中になっていた。そのために彼は家のあらゆる特徴を知っていて、その多くの特徴が組み合わされたところを見るには、どこから眺めればよいかを教えてくれるであろうし、家のさまざまな突出部の影が――それは暖いものうげな煉瓦造りの上に静かにそっと落ちていたのだが――適当な長さになる時がいつなのかを教えてくれるであろう。このほか、すでに述べたように、彼は、なかには著名な人もいく人かいたこの家の歴代の所有者や居住者の大部分の名をあげることができたであろう。そんなことをしながら、この家の運命の現段階が、これまでの栄誉にけっして劣らないものであることを、口にこそ出して言わないが、かたく信じているのだった。三人の男がいる芝生を見おろしていたこの家の正面は、玄関口のある正面ではなく、内側のほうであった。ここでは屋敷内という感じが強く、平らな丘の頂上をおおっている芝の広々とした絨毯は、豪奢な屋内の延長にすぎないように見えた。静かな樫や山毛欅の大木の影は、ビロードのカーテンのようにどっしりとした影を投じていた。そしてここには、室内のように、クッションのついた椅子やはでな色の膝掛けがあり、書物や新聞が草の上に置いてあった。川は少し離れていた。土地が下り勾配になり始めているところでは、厳密にはもう芝生がなくなっていた。それでも川辺までは楽しい散歩道になった。

お茶のテーブルのところにいた老紳士は、三十年前にアメリカから来たとき、荷物といっしょに彼のアメリカ風な容貌を持参してきた。持参したばかりでなく、立派に保存もしていたので、必要とあれば、十分の自信をもってこれを自国に持ち帰ることもできたであろう。しかし現在のところは、明らかに、移転をする様子もなかった。彼の旅路は終っていて、あの偉大な休息の前の休息をとっているのだった。彼の顔は細く、無髯で、端正な目鼻立ちであり、落ち着いた鋭い表情をしていた。明らかに表情豊かな顔ではなかった。そのために充ちたりた鋭敏さの現われた態度は、ますます彼の美点となっていた。その顔は、彼が人生に成功したことを語っているようであったが、それとともに、彼の成功が人を押しのけ、人の恨みを買うようなものではなく、人に不快の念を与えないという点で失敗者のようなところも大いにあることを語っているようだった。彼はたしかに世間をよく知っていたのだが、彼がとうとう大きな紅茶茶碗をテーブルの上にゆっくりと気をつけて置いたとき、彼の肉の落ちた細長い頬に浮かび、彼の剽軽な眼差を輝かせたかすかな微笑には、ほとんど田舎者のような素朴さがみられた。きちんとした身なりで、手入れの行き届いた黒服を着ており、肩掛けをたたんで膝の上に置き、刺繍つきの分厚なスリッパ靴をはいていた。椅子のそばの芝生には美しいコリー犬が横になっていて、主人の顔をじっと見守っていたが、この家のさらに主人然とした顔をしげしげと眺めていた主人と、ほとんど同じほど愛情のこもった態度であった。そして元気よく駈け回っていたテリヤ犬は、ときどき思い出したようにほかの二人の男たちのほうに注意を向けていた。

その一人は、見事なまでに均整のよくとれた体格をした三十五歳の男で、その顔は、さきほどから述べてきた老紳士の顔がアメリカ的であるのにひき比べ、きわめてイギリス的であった。人目をひくほど美しく、血色よく、色白で、率直な顔であり、引きしまって整った面立ちに、生き生きとした灰色の眼をしており、見事な栗色の顎鬚をつけていた。彼は幸運児らしい輝かしいまれに見る容貌をしており、高度の文明に培われた奥ゆかしい気性の様子があらわれていて、彼を見る者はほとんど誰でも、すぐさま彼がうらやましくなったことであろう。拍車つきの乗馬靴をはいていて、遠乗りをしてきたようであった。彼には見たところ大きすぎる白帽子を被っており、両手を後に回し、その片方は――大きな白い形のよい拳だったが――汚れた乗馬用革手袋を握りしめていた。

彼と並んで芝生を散歩していた仲間は、まっ

たく別のタイプの人間で、彼を見る者に非常な好奇心を抱かせたかもしれないが、もう一人の男の場合のように、一目見ただけで彼になりたいという気は起こさせなかったであろう。彼は背が高く痩せて、締りのない弱々しい体格であり、醜く、青ざめていて、才気のある、魅力的な顔をしており、けっして美髯とは言えないほつれた口髭と頬髯を生していた。利口者であり病人であると見受けられたが、これは不幸な組み合わせというよりほかはない。彼は茶のビロード製上衣を着ていた。両手をポケットに入れていたが、その入れ方にはこの習慣が身についてしまったというところがあった。足を引きずるようにしてふらふら歩くのが特徴で、十分しっかりした足取りではなかった。前にも述べたように、椅子に坐った老人のところを通るごとに、彼は老人のほうに目を注いでいた。そしてそういうときに、二人の顔が並ぶと、誰でもすぐに二人が親子であることがわかったであろう。

父親は、息子の目にとうとう気がつき、やさしい微笑を返した。

「なかなかいい気持だよ」と、父が言った。

「お茶を飲まれましたか？」と、息子が聞いた。

「うん、おいしかったよ」

「もっとあげましょうか？」

老人は静かに考えた。

「そうだな、もう少し様子を見ることにしよう」

彼の話しぶりにはアメリカ口調があった。

「寒いですか」と、息子が聞いた。

父親はゆっくりと両脚をさすった。

「さあ、どうだかな。実際に寒さを感じるまではわからないのでね」

「多分誰かがお父さんのために感じてくれますよ」と、息子のほうが笑いながら言った。

「誰かがいつでもわしのために感じてくれるといいね。どうです、ウォーバトン卿、わしが寒いのかどうか、教えていただけますかな？」

「よろしいですとも」と、ウォーバトン卿と呼びかけられた紳士はすぐに答えた。「とても気持よさそうにしていらっしゃるとしか思えませんよ」

「そうですね、大体のところおっしゃるとおりでしょう。」老人は緑の肩掛けを見おろして膝に当っているところをなでた。「長年気持よくしてきたので、すっかり馴れっこになってしまって、それがわからないというわけなのですね」

「そうです、気持のよいことに退屈してしまうのです。気持が悪いと初めてそれがわかるものですよ」と、ウォーバトン卿は言った。

「人間って気難しいものですね」と、仲間の男が言った。

「そう、われわれが気難しいということは確かだな」と、ウォーバトン卿はつぶやくように言った。

それから三人の男はしばらく黙っていた。若い二人は老人を見おろしながら立っていたが、老人はお茶のお代わりを求めた。

「その肩掛けをもてあましていらっしゃるのでしょうね」と、ウォーバトン卿は、仲間の男が老人の茶碗にお茶を注いでいるときに言った。

「そんなことはない。肩掛けは必要なんだ」と、ビロード上衣の紳士が叫んだ。「君、そんなことお父さんに言ってはいけないよ」

「これは家内のものでしてね」と、老人は言葉少なく言った。

「そういう特別の理由がおありなら——」ウォーバトン卿は申し訳ないといった身振りをした。「家内が帰ってきたら返さなければならんのです」と、老人は言葉を続けた。

「どうかそんなことはしないでください。ずっと掛けていてくださいよ。すっかり年をとってしまった脚なんですから」

「わしの脚の悪口を言っちゃいかんよ。おまえの脚に負けないくらいだと思うね」と、老人が言った。

「ぼくの脚の悪口ならいくらでも言ってください。」息子はお茶を渡しながら答えた。

「われわれ二人はちんばの家鴨さ。たいした違いはないよ」

「ぼくのことを家鴨とはありがたき幸せです。お茶はいかがですか」

「そうだね、大分熱いよ」

「熱いのがいいと思ってそうしたんです」

「いいところはほかにもたくさんある」と、老人はやさしくつぶやくように言った。「ウォーバトン卿、息子はとてもいい看護人ですよ」

「ちょっと不器用じゃありませんか」

「いや、いや、不器用じゃありません——息子も病人だと思えばね。とてもいい看護人ですよ——『病気の看護人』としては。息子も病人ですから、息子のことを私の『病気の看護人』と言っているのです」

「やめてくださいな、お父さん」と、醜い青年は叫んだ。

「だって、そうじゃないか。おまえが病気でなければいいと思うよ。でもおまえとしてもどうしようもないことさ」

「どうしようもあるようにしてみてもいいですよ。これは名案だ」と、若い男は言った。

「ウォーバトン卿、あなたは病気になったことがおありですか」と、父親が尋ねた。

ウォーバトン卿はしばらく考えた。

「ええ、一度あります。ペルシャ湾で」

「お父さん、あれはいい加減なことなんですよ。冗談のようなものです」と、もう一人の若い男が言った。

「今じゃずいぶんいろいろの冗談があるようだな」と、お父さんは静かに答えた。「ともかく、あなたは病気などされたことはないという顔をしておられる」

「この人の病気は人生に退屈していることなんです。ちょうどそういう話を聞かされていたところで、痛烈な人生論をやっていたのです」と、ウォーバトン卿の友人は言った。

「本当なのですか？」と、老人はまじめに聞いた。

「本当だとしても、ご令息は少しも慰めになりませんでした。なにしろ話相手としては情ない人で——れっきとした皮肉屋ですからね。一切を信じていないようですね」

「これも別の冗談ですよ」と、皮肉屋と非難された男が言った。

「健康が勝れないためなのですよ」と、父親がウォーバトン卿に説明した。「考えが変わるのですね。そしてものの見方に色がついてしまう。自分には機会がなかったのだと思っているようです。ですがこれはまったく理窟だけのことのようでしてね、気が滅入るということはないようです。陽気でないところを見たことはまずありませんね——たいていちょうど今のような調子です。よく私を元気づけてくれますよ」

若い男はこう言われてウォーバトン卿のほうを見て笑った。

「絶大なる賛辞なのでしょうか、軽薄だという非難なのでしょうか？　お父さん、ぼくの理窟というのを実践したほうがいいですか？」

「とんでもない。そんなことすればおかしなことになるぜ」と、ウォーバトン卿が叫んだ。

「おまえにあんな言い方はしてもらいたくないね」と、老人が言った。

「ウォーバトンの言い方はぼくのよりひどいですよ。この人は退屈だという振りをしているのです。ぼくは少しも退屈なんかしていません。人生はまったく興味津々たるものです」

「興味津々か。そんなに興味を持ってはいけないね」

「こちらに伺うときは少しも退屈しませんよ。めったにないおもしろい話ができますからね」と、ウォーバトン卿が言った。

「これもまた冗談ですか？」と、老人は聞いた。

「どこだって、退屈するわけはありませんよ。私があなたの年配だったころには、退屈だというようなことは聞いたことがありませんでしたね」

「大分晩熟だったのですね」

「いや、早熟でしたよ。まさにそのためだったのです。二十歳のときにはすっかり出来上がっていました。懸命に働いていました。仕事があれば退屈などしないものです。しかしあなたがた若い人たちは、みんな怠け者ですね。自分の楽しみのことを考えすぎる。気難しすぎるし、怠けすぎるし、金がありすぎる」

「待ってください、金がありすぎると言って人を非難する資格は、あなたにはなさそうですね」と、ウォーバトン卿は言った。

「私が銀行家だから、と言われるのですか？」と、老人は聞いた。

「そう申してもいいし、それにあなたは減法財産家でいらっしゃるからです」

「大金持ではない」と、もう一人の若い男は父親のことを言った。「莫大な金を投げ出してしまったんだ」

「でも、その金はご自分のものだったのだろう。とすれば財産家の証拠としてこれ以上のものはないわけさ。社会のために金を投じた人が、楽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しみを求めすぎると人のことを言うのはおかしいですよ」
「お父さんも楽しみが大好きだが――それは人を楽しませることなんだ」
老人は頭を横に振った。
「わしは、人様を楽しませるために尽くしたなどと言うつもりはないよ」
「お父さんは本当に謙遜すぎますよ」
「これも冗談のようなものです」と、ウォーバトン卿が言った。
「あなたたち若い人には冗談が多すぎる。冗談がないときには、することがない」
「幸いにして、いつも冗談はいくらでもありますよ」と、醜い青年が言った。
「わしはそうは思わないな。事態は次第に重大になってきていると思う。あなたたち若い人にもそれがわかってくるだろう」
「次第に重大化する事態――これは冗談を言ういい機会ですよ」
「冗談と言っても渋い冗談にしかならないだろう。必ず今に大きな変革が起こり、それもすべてがよいほうに変わるわけではない」
「私もそのとおりだと思いますよ」と、ウォーバトン卿が言った。「きっと大きな変革があるでしょう。そしていろいろ妙なことが起こりますよ。だからこそ、あなたのご忠告に従うのがむずかしいと思っているのです。先日、私に何かしっかりつかまなければいけないとおっしゃいましたね。すぐあとで吹き飛ばされてしまうかもしれないものをつかまえるなど、ちょっと考えてしまいますよ」
「君は美しい女をつかまえなければいけない」と、彼の仲間が言った。「この人は一生懸命恋をしようとしているのですがね」と、彼は父親に説明してやった。
「美しい女たちからが、吹き飛んでしまうかもしれない」と、ウォーバトン卿が叫んだ。
「いや、いや、女たちは大丈夫飛ばされはしないでしょう。私がお話している社会的政治的な変革に影響されることはないでしょう」と、老人が答えた。
「美しい女性は温存されるとおっしゃるのですか？　結構ですね、私はできるだけ早く一人つかまえて、救命用具のように私の首に巻きつけておきましょう」
「婦人たちがわれわれを救ってくれるでしょう。というのは立派な婦人たちのことですよ――婦人と言ってもいろいろありますからね。立派な婦人に求婚して結婚なさい、そうすればあなたの人生はずっとおもしろくなりますよ」
一瞬の沈黙は、おそらく二人の聴き手が、この話にあらわれた老人の雅量に打たれたことを示したのだった。彼の息子もその友人も、老人自身の結婚生活が幸福なものではなかったことを知っていたからだ。しかし彼の言葉にもあったように、彼は女もいろいろだと見ていた。そしてこの言葉は自分の失策の告白のつもりであったかもしれないが、若い二人のどちらにしても、老人が選んだ婦人は明らかに立派な人ではなかったなどとは、もちろん口にすべきことではなかった。
「おもしろい婦人と結婚すれば、私も人生がおもしろくなる、とおっしゃるのですか？」と、ウォーバトン卿は聞いた。「私は結婚には全然熱心でないのです――ご令息の言われたことは間違っています。でもおもしろい婦人のお蔭で私がどうなるかは、わかりませんね」
「君がおもしろい婦人というのは、どういう人のことを考えているのか、知りたいね」と、彼の友人が言った。
「ねえ君、人の考えなんかわかるもんじゃないよ――特にぼくの考えみたいに雲を摑むようなものの場合にはね。ぼくに自分の考えがわかるなら――それだけで長足の進歩だよ」
「あなたが気に入る人なら誰に恋をしてもかまいませんよ。しかし私の姪に恋をしてはいけません」と、老人が言った。
息子は突然笑い出した。「その気を起こさせようとしてそんなことを言われるのだと思ってしまいますよ。お父さんは、イギリス人と三十年もいっしょに暮らしてきて、イギリス人の言うことはずいぶん覚えてこられたわけです。でもイギリス人が口に出して言わないことはご存知ない」
「私は言いたいことを言っているのだよ」と、老人は落ち着きはらって言った。
「タチェットさん、あなたの姪御さんを存じあ

げていませんが、姪御さんのことを伺うのは初めてですね」と、ウォーバトン卿が言った。
「家内の姪です。家内がイギリスに連れてきます」
　すると、息子のタチェットが説明をした。
「母はアメリカで冬をすごしていたんだが、もう帰ってくるころなのさ。姪を見つけて、いっしょに来るように誘ったと手紙で言ってきたのだ」
「なるほど――親切なことをされたね。その方はおもしろいご婦人だろうか？」と、ウォーバトン卿が言った。
「君と同じに、ぼくたちもほとんど何も知らないのだよ。母は詳しいことには触れていないんだ。たいていは電報で連絡があり、その電報がわけがわからないときている。女は電文の書き方を知らないと言われるが、母は圧縮の仕方を完全に習得している。『アメリカニアキタ」アツクテタマラヌ」ヨキセンシツアリシダ　イメイトカエル』こういう電報が来るのだが、これはいちばん最近のだ。その前に来たものには姪のことがはじめて書いてあったと思う。『バントウワルクホテルカエタ」フミココニオクレ」イモウトノムスメヲヒキトル」チチヲサクネンナクショーロッパ　ニクル」アネフタリ「トテモシツカリモノ』これには父と二人で頭をひねるだけでよくわからなかったが、いくとおりにも解釈できるみたいでね」
「ただ一つだけ非常にはっきりしていることは、家内がホテルの番頭に一喝くらわせたことだね」と老人が言った。
「ぼくはそれも怪しいと思う。番頭はお母さんを追い出したんだから。ぼくたちははじめ妹とあるのは番頭の妹かと思ったんだが、あとに姪とあるので、妹はぼくの叔母のことらしい。それから、二人の姉とはいったい誰の姉なのかが問題になった。たぶん死んだ叔母の娘のことだろう。しかし『とてもしっかり者』は誰のことで、どういう意味でこの言葉を使っているのか――まだ未解決なのさ。この言葉は母が世話するようになった若い婦人のことを特にさしているのか、二人の姉にもあてはまるのか――意志の強い性質を言っているだけなのか、経済的な心配もないと言っているのか？　つまりちゃんとした生活ができているという意味なのか、人の世話にはなりたがらないということなのか？　それともただ勝手気儘が好きだというだけのことなのか？」
「ほかにどんな意味があるとしても、そういう意味は確かだろう」と、タチェット氏が言った。
「ご自分で確かめるんですね。奥様はいつお着きですか？」と、ウォーバトン卿が言った。
「それがまったくわからないのでしてね。よい船室が見つかり次第というのですから。まだ見つからないのかもしれませんし、あるいはもうイギリスに上陸しているのかもしれません」
「その場合は多分電報を打たれるでしょう」
「電報が来るだろうと待っているときは、けっして電報を打ってくれません。来ないと思っているときだけです。突然私のところに現われるのが好きなのです。私が何か悪いことをしているところを見届けるつもりなのでしょう。まだ現場を抑えたことはないのですが、家内はまだあきらめてはいませんよ」と、老人は言った。
「それはお母さんがしっかり者だからですよ」と、彼女の息子はもっと好意的に解釈した。「アメリカのご婦人たちがどういう意味でしっかりしているとしても、お母さんは負けはしませんね。何でも自分でやるのが好きだし、人から助けてもらうのが嫌いで、そんな力が人にあるとは思っていません。お母さんにとってはぼくなんか、糊のついていない郵便切手みたいに役に立たないし、リヴァプールまで出迎えに行ったりすれば、けっして許してくれないでしょう」
「君の従妹が到着されたときには、ぼくにせめて知らせてくれるだろうね」と、ウォーバトン卿は聞いた。
「前に申した条件つきでね――姪に恋はしないという」と、タチェット氏は言った。
「それはむずかしそうですね。私じゃ十分でないのでしょうか？」
「あなたでは十分すぎてだめです――あなたとは結婚してもらいたくないのでしてね。婿探しに来たのではないでしょうよ。大勢の娘たちがそのためにやって来ていますがね。まるでアメリカには立派なお婿さんがいないとでもいうように。それにおそらく婚約しているでしょう。

アメリカの娘は大抵婚約してますからね。その上、結局、あなたが立派な旦那様になるかどうか、これはよくわかりませんからな」

「きっと婚約されているでしょう。アメリカの娘さんをずいぶん知っていますが、みんな婚約しています。それでも婚約していない場合とどこが違うのか、私にはさっぱりわかりませんでした。私が立派な夫になれるかどうかは、私にもわかりませんね。やってみるよりほかありません」

「いくらでもやってみてください。しかし姪相手にやってみてくださっては困る」と、老人は言ったが、この結婚に対する彼の反対には、きわめてユーモラスなところがあった。

「そうですね、結局のところ、姪御さんはやってみがいのある方ではなさそうですな」と、ウォーバトン卿は相手以上にユーモアたっぷりに言った。

第二章

こうして二人が冗談を言い合っている間に、ラルフ・タチェットはぶらぶらとその場を離れて行った。例のごとく前かがみに歩き、両手をポケットに入れ、足元には騒々しいテリヤの小犬がいた。顔は家のほうに向けていたが、眼は何か考えながら芝生に注がれていた。したがって家の戸口に現われた女性に見られていても、しばらくはそれに気がつかなかった。突然、立て続けに甲高い鳴き声をあげながら、前に飛び出て行った犬の動作によって、彼の注意は彼女のほうに向けられた。犬の鳴き声は吠えつくというより、歓迎のしるしを表わしたものであった。そこに現われた人は若い婦人で、彼女はすぐにテリヤの挨拶がわかったようであった。犬はまっしぐらに進んで行って、彼女の足元に立ち止まり、顔を見上げてしきりに吠えた。するとすぐさま彼女はしゃがんで犬を両手でつかまえ、抱き上げて顔を眺めると、犬はしきりにうれしそうに吠えていた。犬の主人はあとからやってきて、この犬の新しい友達が黒い服装をした背の高い女であることがわかり、一目で美しい人だと思った。彼女は帽子を被っていなかったが、そうすると今まで家のなかにいたのかもしれない――このことはこの家の主人の息子を当惑させた。主人の病気のために、しばらくは訪問客がないようにしなければならないと思っていたからである。そのうちに、ほかの二人の紳士も新来の客に気がついていた。

「おや、あの婦人は誰だろう？」とタチェット氏が言った。

「多分奥様の姪御さんでしょう――しっかり者の。犬のあやし方から見て、きっとそうだと思いますね」と、ウォーバトン卿が言った。

コリー犬も注意を家のほうに向けていたが、戸口の若い婦人のほうに早足で進んで行った。進みながらゆっくりと尻尾を振っていた。

「だが家内はどこにいるのだろう？」と、老人は口ごもるように言った。

「あのご婦人が奥様をどこかに置いてきたのでしょう。しっかり者らしくありませんね」

その娘はまだテリヤを抱きながら、微笑を浮かべてラルフに話しかけた。「これはあなたの犬でございますか？」

「ちょっと前まで私のでしたが、突然あなたがいかにも持主らしく抱いていらっしゃるのです」

「二人のものにしてもよろしいでしょう？　とてもかわいい犬ですこと」と、娘が言った。

ラルフはしばらく彼女を眺めた。思いがけないほど美しかった。「すっかりあなたのものになさっていいですよ」と言った。

この若い婦人は自分を信ずるところ厚く、また他人をも深く信じている様子であったが、突然このような好意を示されて顔を赤らめた。「私は多分あなたの従妹だということを申し上げなければなりませんわ」と言いながら犬を下におろした。「もう一匹いますわ」とコリー犬がやって来たとき急いで付け加えた。

「多分ですって？　そうに違いないと思っていましたよ。母といっしょにいらしたのですか？」と、ラルフは笑いながら言った。

「はい、三十分前に」

「母はあなたをここにおいて、また行ってしまったのでしょうか？」

「いいえ、まっすぐにお部屋に行かれました。私があなたにお会いしたら、七時十五分前にお

部屋にいらしていただきたいと、お伝えするようにということでした」

ラルフは彼の時計を見た。「それは、ありがとうございます。時間どおりに行きましょう。」それから従妹のほうを見て「よくいらっしゃいました。どうかよろしく」と言葉を続けた。

彼女はいかにも敏捷に見てとる眼でもって、あらゆるものを見ていた――相手の男、二匹の犬、木立ちの下の二人の紳士、彼女を取り巻いている美しい眺め、など。「このお屋敷ほど美しいものは見たことがございません。お家はずっと回ってみました。本当にすばらしいところですわね」と言った。

「ずっと前に来られたのに、何も知らなくて失礼しました」

「イギリスでは人が来ても出迎えたりして大騒ぎをしないのだとお母様がおっしゃるので、別に気にいたしませんでした。あそこにいらっしゃる方の一人がお父様ですか？」

「そうです、年寄りのほう――坐っているほうです」と、ラルフが言った。

若い娘は笑い出して「もう一人の方のほうだなんて思いませんわ。あれはどなたですの？」

「私たちの友人で、ウォーバトン卿と言います」

「まあ、貴族がいればいいと思っておりましたの。まるで小説のようですわ。」それから「本当にかわいらしい犬ね」と突然言って、腰をかがめ、またテリヤを抱き上げた。

彼女はラルフと会ったところに立ったままであって、庭に出ようともタチェット氏のところに話しに行こうとも言い出さなかった。彼女がすらりとした美しい姿勢で戸口のところを離れないので、相手をしていたラルフは、彼女は老人がやってきて挨拶をするのを待っているのだろうかと思った。アメリカの娘たちはちやほやされるのに馴れているし、この婦人がやり手であるということも知らされていたのだ。実際、ラルフは彼女の顔にそういう性格を読みとることができた。

「行って父とお話になりませんか」と、それでも彼は聞いてみた。「年をとっていて病身なのです――椅子に坐ったままにしています」

「まあ、それは本当にお気の毒ですわね」と、娘は言って、すぐに歩き出した。「お母様のお話から、大分――大分お丈夫な方かと思っておりました」

ラルフ・タチェットはしばらく黙っていた。

「母は一年も父に会っておりません」

「でも、いい所に坐っていらっしゃいますわ。ワンちゃんたち、さあ行きましょう」

「あそこは本当にいい所です。」ラルフはそう言って、並んで歩いている彼女の横顔を見た。「名前を教えてくださいませんか？」テリヤのほうにまた注意を向けながら尋ねた。

「父の名前ですか？」

「ええ」と剽軽に言った。「でも私がそんなことを伺ったことはお父様に内証ですよ」

こうして老タチェット氏の坐っている所まで来ると、タチェット氏はゆっくり椅子から立ち上がって、自己紹介をした。

「お母さんが帰られました。こちらはアーチャーさんです」と、ラルフが言った。

老人は両手を彼女の肩に置き、しばらく慈愛のこもった眼で彼女を眺めてから、やさしくキッスをした。

「来てくださって本当にうれしく思います。でも出迎えができるように知らせてくださったならばよかったのに」

「私たちお出迎えをしていただきましたわ。お玄関には十人以上の召使いがおりました。それに年とった女の人がご門のところでお辞儀をしてくれましたわ」と、アーチャー嬢が言った。

「それ以上の歓迎ができるのです――もしわかっていたなら。」老人は立ったまま、微笑を浮かべて、両手をもみ合わせ、彼女に向かってゆっくりと頷いていた。「しかし家内は出迎えが嫌いでしてね」

「まっすぐにお部屋にいらっしゃいました」

「そう――そして鍵をかけて閉じこもってしまったのです。いつも同じです。そうですね、来週あたり会えるでしょう。」こう言ってタチェット夫人の夫は、ゆっくりとまた椅子に腰掛けた。

「その前にお会いになりますよ。奥様は食事に降りていらっしゃいます――八時に。七時十五分前をお忘れにならないように」とラルフのほうを向いて付け加えた。

「七時十五分前に何があるのかい？」

「お母さんに会うのです」と、ラルフが言った。
「それはうらやましいな」と、老人はつぶやくように言った。「さあ、お掛けください――お茶を飲んでいただきましょう」と、妻の姪に向かって言葉を続けた。
「こちらに参るとすぐ私の部屋でお茶をいただきました」と答えてから「お加減が悪いそうで、本当にいけませんわ」と付け加え、この家の年老いた主人のほうに眼を注いだ。
「いや、私は老人でしてね。老いこむときがきたのです。しかしあなたが来られたのだから、早くよくなるでしょう」
彼女はまたあたりを眺め回して、芝生、大木、葦が生い茂り、銀色に輝いたテムズ川、美しい古い家などを見ていた。こうしてあたりを眺めている間にも、彼女は同席の人たちを細かに観察していた。明らかに頭がよく、しかも興奮している若い婦人の観察が、広い範囲にわたっていたことは、容易に考えられることであった。彼女は腰を掛けており、小犬は手放していた。膝のところでその白い手を黒い着物の上に組んでおり、頭はまっすぐにあげ、眼は輝いていた。彼女はさまざまな印象を敏捷に脳裡に収めていた様子だったが、その敏捷さに伴ってのびのびとした態度で、しなやかな身体をあちこちに向けていた。彼女の受けた印象は数多く、それがすべて、澄んだ静かな微笑に反映していた。
「こんなに美しいものは見たことがございません」と、彼女は言った。
「大変いい眺めです」と、タチェット氏は言った。「あなたのお気持はわかりますよ。私はすっかり馴れてしまいました。しかしそういうあなたご自身が美しくいらっしゃる」と露骨な冗談など微塵もない愛想のよい態度で付け加えた。それに自分のような年寄りならば、こういうことを言っても――たとい相手がこんなことを言われてびっくりするかもしれない若い娘たちであっても――かまわないのだとすっかり安心していた。
この若い娘がどの程度にびっくりしたか、正確に言う必要はない。彼女はしかしすぐに頬を赤らめて立ち上がったが、それは相手の言葉を反駁するものではなかった。
「はい、もちろん、美しいですわ。」彼女はちょっと笑い、大急ぎで言った。「このお家はどのくらい古いのでしょうか？　エリザベス朝のものですの？」
「チューダー朝初期です」と、ラルフ・タチェットが言った。
彼女は彼のほうを向いて、その顔を少し見守るようにした。「チューダー朝初期ですって？何てすばらしいんでしょう。それにほかにもたくさん古い家があるのでしょうね」
「もっといい家がたくさんありますよ」
「そんなこと言っちゃいけない」と、老人が抗議した。
「これほどいい家はありませんよ」
「私はとてもいい家を持っています。ある点で私の家は一段と立派ですね」と、ウォーバトン卿が言った。彼はこれまで黙っていたが、アーチャー嬢をずっと注意して眺めていたのだ。彼は少し前屈みに彼女のほうに身を乗り出して微笑を浮かべていた。婦人に対する彼の態度は見事なものであった。娘はすぐにそれがわかったし、男がウォーバトン卿であることも忘れていなかった。「あなたにぜひともお目にかけたいものです」と、彼は付け加えて言った。
「この人の言うことを信用してはいけませんよ。見なくてもいいですよ。見苦しい老朽バラックでしてね――この家とは比べものになりません」と、老人が叫んだ。
「私にはわかりませんわ――どちらがいいのか」と言いながら、娘はウォーバトン卿のほうに微笑みかけた。
この議論にラルフ・タチェットは少しの興味も示さなかった。ポケットに手を入れて立っている彼の様子は、はじめて会った従妹と話を続けたくてたまらないといったふうであった。
「犬がとてもお好きですか？」と手始めに聞いた。利口な男にしてはまずい切り出し方であった。
「本当に、とても好きですわ」
「あのテリヤをあなたのものにしてください ね」と続けたが、相変わらずまずい言葉であった。
「ここにおります間は、喜んで私のものにさせていただきます」
「長い間いらっしゃるのでしょうね」

「そう言っていただいて、ありがたいのですけれども、私にはわかりませんの。伯母様が決めることですもの」
「私がいっしょに決めます――七時十五分前に。」こう言ってラルフはまた時計を見た。
「ともかくこちらに参れてよかったと思っておりますわ」
「あなたが人にいろいろ決めさせる方だとは思えませんね」
「そんなことありませんわ。私の好きなように決まるならば」
「あなたの滞在期間は私の好きなように決めますよ。私たちがあなたを知らなかったとは、まったくおかしな話ですね」
「私はあちらにおりました――会いに来てくださりすればよかったのです」
「あちらですって？　どこのことです？」
「合衆国です。ニューヨークやオールバニーやいろいろな所です」
「合衆国に行ったことはありますよ――方々回りました。しかしあなたには会いませんでしたね。わけがわからないな」
　アーチャー嬢はちょっとためらった。
「あなたのお母様と私の父の間は、私の子供のころに母が亡くなってから、仲が悪かったためですわ。そのために私たちはあなた方に、お会いしないことになっておりました」
「そうなのですか。でも私は母の仲違いを全部引き受けたりはしませんよ。とんでもないことだ」と、ラルフは叫んだ。「最近お父様を亡くされたのですか？」と今度はまじめな調子で尋ねた。
「はい、一年あまり前でした。その後は伯母様は私にとても親切にしてくださいました。会いにいらっしゃって、ヨーロッパに行かないかと言ってくださいました」
「そうですか。母はあなたを養女にしたのですね」とラルフが言った。
「養女ですって？」娘は眼を見張った。そしてまた頬を赤くして、一瞬苦痛の表情を浮かべたのでラルフは驚いてしまった。彼は自分の言葉が相手にどんな効果を及ぼすか、十分考えていなかったのだ。ウォーバトン卿はアーチャー嬢をもっと近くで眺めたいという気持をずっと表わしていたのだが、ちょうどこのとき二人の従兄妹のほうに歩み寄ってきた。そして彼が近づいてきたとき彼女はその大きく見張った眼を彼のほうに向けた。「私を養女にされたなんて、そんなことありませんわ。私は養女にしていただきたいとは思っておりませんもの」と、彼女が言った。
「これは大変失礼しました」と、ラルフは口ごもるように言った。「私の申したのは――ただ。」彼は何を申したのか自分でもよくわからなかった。
「あなたの申されるのは、伯母様が私の世話をしてくださった、ということでしょう。そうですわね、人の世話をなさるのがお好きですわ。私にとても親切にしてくださいました。でも」と彼女はぜひはっきりさせておきたいという気持を顔に表わして「私は自由にしているのがいちばん好きですわ」と付け加えた。
「家内の話をされているのですか？」と老人は椅子から大きな声を出して言った。「こちらに来て、家内のことを話してください。いろいろ話を聞くのはいつも楽しみでしてね」
　娘はちょっとためらいながら、微笑を浮かべた。
「本当に情深い方ですわ」と、彼女は答えてから、伯父のそばに歩み寄ったが、老人は姪の言葉を聞いて、陽気に笑い出した。
　ウォーバトン卿は彼女が離れて行ったあとラルフ・タチェットと二人で立っていたが、まもなくラルフに「おもしろい婦人とはどういう婦人なのかぼくの考えが知りたいと言っていたね。あの人がそうだ」と言った。

第三章

　タチェット夫人は確かに変わったところの多い人であって、何カ月も留守をしてから夫の家に帰ってくるときの態度は、その顕著な一例であった。彼女の行動にはすべて彼女独自のやり方があった、と言えば彼女の性格の簡単明瞭な説明となるのであって、情深いところがないわけではけっしてないのだが、そうかといってやさしい人という印象を与えることはめったにな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com